第３章

展示計画

１．　基本的な考え方

２．　展示展開の方針

３．　展示ストーリーと各ゾーンのねらい

４．　展示エリアの構成

５．　展示空間の考え方

６．　展示コンテンツの考え方

７．　展示運用の考え方

１．基本的な考え方

展示計画は、アーカイブ拠点施設の中核的な機能として位置付けます。

ここでは、普通にあった毎日の暮らし、この土地の伝統や文化、自然風景、原子力発電が整備された経過、それらすべてを含めた事故前からの日常、そしてあの日から現在進行形で続く福島だけの“経験”と“教訓”を後世へしっかりと伝えます。

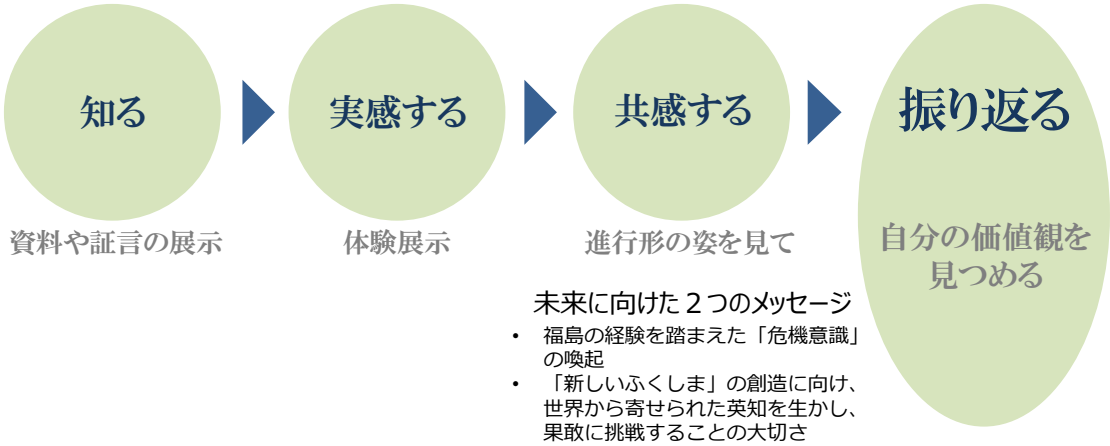
２０１１年３月１１日１４時４６分、日常を一瞬にして奪った地震、津波、そして原子力発電所の事故。

この「複合災害」という、誰もが初めての経験の中での混乱や困難、判断し行動したことは全てが貴重な資料（財産）です。

アーカイブ拠点施設の展示では、その資料（財産）を“教訓”として伝え、今なお続いている福島の復興の姿を記録しながら公開するという役割を果たし、未来へ向けたメッセージを発信していきます。

「人」が経験し、「人」が助け合いながら立ち向かってきた災害。その記録と記憶の展示に当たっては、「人」が「人」に伝えていくことも大切にします。

ここでの体験によって、この災害を「自分事」として捉え、日常生活を振り返ったときに、豊かさや幸せとは何か、今、そしてこれからの自分がすべきことはどんなことなのか、といった自分の価値観を振り返るような想いを抱いてもらうことを目指していきます。



２．展示展開の方針

基本的な考え方やコンセプトを具体化する展示の展開方針として、以下の３つを掲げます。

（１）世界初の経験を記録し発信する

蓄積された記録を生かした「体験型」学習
蓄積された資料、証言に基づく展示 現物によるリアルな展示と、実体験の記録 体験型の学習により、理解を深める

（２）生の声を伝え、記録を重ねる

「人」「語り部」を通して県民の想いを国内外に発信
県民参加による生の声、想いの発信 記録と記憶を次世代へ継承する 経験を共有し、未来の防災へつなげる

（３）日々変わる最新の姿（教訓と新たな取組）を伝える

福島の最前線～光と影～を「リアルタイム」で発信
原子力災害からの復興の軌跡を公開

▼

展示体験を通して、この災害を「自分事」として捉え

これからの生活、自分について考える

３．展示ストーリーと各ゾーンのねらい

原子力発電所は何故この地域にあり、何をもたらしたのか。
文化や歴史的背景、日々の暮らし、それを一瞬で奪った事故。

■展示ストーリー

■各ゾーンのねらい

1 プロローグ

地震や津波が起こっても「原子力発電所の事故など起こるはずは無い」という安全意識と共にあった過去。それが一瞬にして崩壊した事実、この災害の特徴を象徴的に発信し、自分事化するきっかけを創り、展示全体への意識をかきたてる。

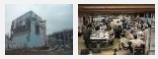
【展示内容例】
- 原発の誘致前後の地域の状況や考え方、歴史など
- ここにあった普通の暮らし、故郷の風景
- 原発の安全性や地域貢献性を伝える資料
- 原子力災害での経験に関する県民からのメッセージ

ふるさとの日常

2 災害のはじまり
原子力発電所事故～／安全神話の崩壊～

地震、そして津波の襲来から原子力発電所の電源喪失、その後の原子力発電所事故。
誰もが初めて経験するこの複合災害の発生時に、国・県・市町村・医療・警察・消防・企業などが一丸となり対応した記録。現場の深刻さや混乱に立ち向かった人々の気持ちや行動、判断を、臨場感豊かに伝える。

【展示内容例】
- 想定外の事象を示す資料
- 原子力発電所に大きな影響を及ぼすほどの津波だったことを示す資料
- 国・県・市町村等や災害対策本部の動き
- 県民や職員等の証言等


事故当時の対応と記録

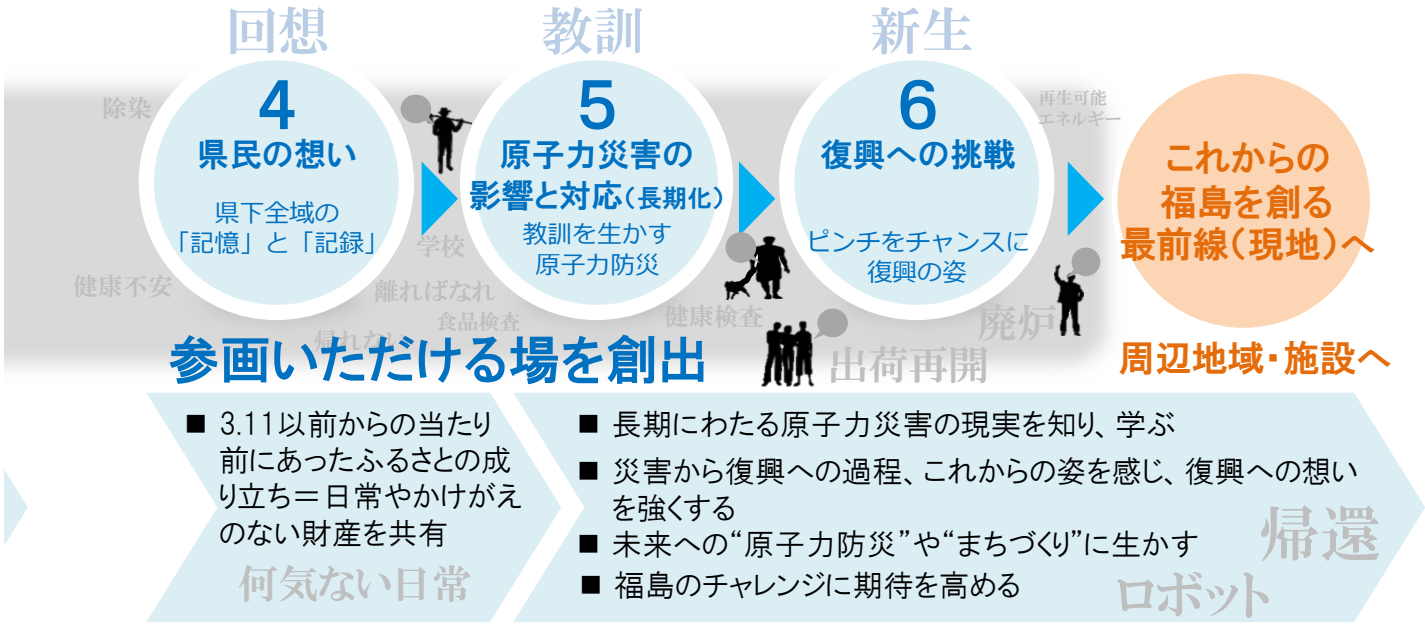
3 原子力災害の影響と対応（初期）
～放射線からの避難、事故への国内外からの注目～

手探りの初期対応。「広域避難」の困難や混乱から、この災害の特殊性を訴求する。また、人々の助け合いや国内外からの注目も含め、実際に経験した「人」に着目し、生の言葉で原子力災害の初動の記録や記憶、国内外からの支援への感謝などを振り返り、経験の記録として発信する。

【展示内容例】
- 避難の経緯を記す資料（各市町村の記録等）
- 避難の混乱や苦悩に関する人々の証言
- 避難の受け入れ市町村や施設の人々の証言
- 国内外からの注目、支援の状況を示す資料

支援の記録

その事実を知り、現実を実感し、前進する福島のリアルな姿を感じます。そして、その福島をもっと見てみたいと感じ、他の拠点等への回遊へと導きます。



4 県民の想い
～県下全域の「記憶」と「記録」～

原子力発電所が人々の生活に溶け込み、その中にあった何気ない「ふるさとの日常」と、原子力災害が起こった後の県民意識の変化や苦しみ、ふるさとへの想いなどを県民の目線で伝え、来館者それぞれの立場で安全を考えることに導いていく。

【展示内容例】

- 様々な県民の視点から、事故前のふるさとの日常、事故の記憶、その後の暮らしや今への想いを伝える資料、証言、映像
- 妊産婦の不安や誰もいない街など複数テーマを設定した証言展示
- 県民の新たな活動

誰もいない街

子育てへの想い

5 原子力災害の影響と対応（長期化）
～教訓を生かす原子力防災～

原子力災害が長期化する中、どのように対応してきたか。その「影響」と「対応」の軌跡を来館者が体感し、教訓として習得する。
ここでは「考える」「学ぶ」ことを中心に、原子力防災の体験学習などの場として、研修や教育にも寄与する。

【展示内容例】

- 放射線量の推移とリアルタイム表示、除染の取組
- 農林水産業等での放射性物質対策（吸収抑制対策、モニタリング検査、米の全量全袋検査等）
- 人々の放射線への不安に関する証言と不安の払拭の取組と成果
- 避難の長期化の事実関係資料
- 心身の健康管理、コミュニティの維持、見守り等の取組

スクリーニング検査

6 復興への挑戦
～ピンチをチャンスに　復興の姿～

困難な現状から生まれ続ける様々なチャレンジを発信する。世界の英知を集めた前例のない先端技術への取組、復興・再生していく現在進行形の福島の様子、そして果敢に挑戦することの大切さを発信する。

【展示内容例】

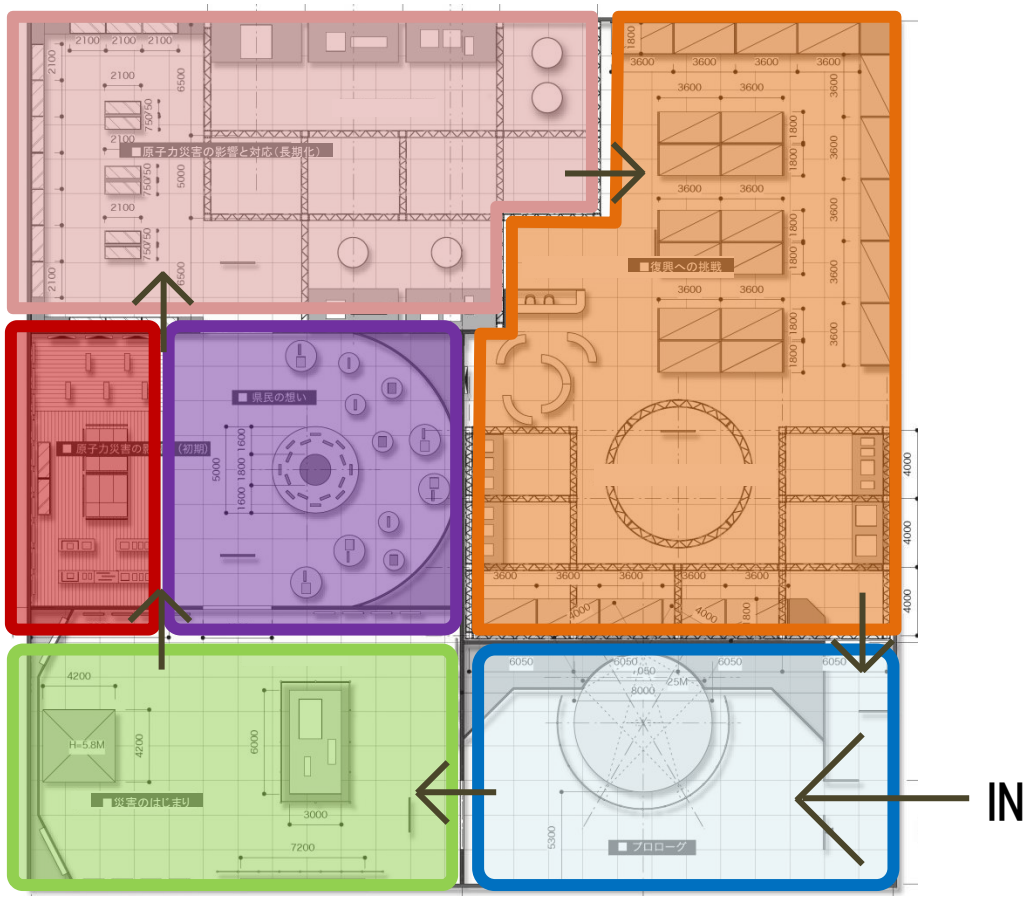
- 県内の様々なチャレンジの俯瞰
- 国・県・市町村が一体となった復興推進の経緯・展望
- 福島イノベーション・コースト構想の取組、新産業の創出、産業・生業の再生に関する産学官一体となった取組の経緯と展望
- 若者の未来に向けた考え・証言

新しい産業への挑戦

再出荷・ブランド化への挑戦

４．展示エリアの構成

展示ストーリーの１から６に沿った動線とした各ゾーンの配置を行います。本構想では、各ゾーンはボリューム検証までとし、詳細なゾーニング及び展示コンテンツ、手法等の検証は設計時に検討していきます。



【展示エリアのゾーニング】

１	プロローグ
	全体ガイダンス。この災害の特徴を象徴的に発信する。
２	災害のはじまり
	原子力災害のきっかけとなった地震と津波、そして誰もが初めて経験する災害が始まった、その現場の記録を臨場感を持って発信する。
３	原子力災害の影響と対応（初期）
	手探りの初期対応や広域避難など、原子力災害直後の状況、その特殊性を訴求する。また、人々の行動や国内外からの支援など、人の行動の記録や言葉によって後世に残す。
４	県民の想い
	原子力発電所が人々の生活に溶け込んでいた普通の暮らし。それが災害によって一変してしまった苦しみや想いなど、県民の目線で語り、伝える。
５	原子力災害の影響と対応（長期化）
	原子力災害の影響と対応の軌跡を教訓として伝える。原子力防災の体験学習の場として活用する。
６	復興への挑戦
	困難な状況から生まれる様々なチャレンジ、再生していく福島の姿を発信する。

５．展示空間の考え方

（１）展示室は更新性などを考慮し、細かく区切らずフレキシブルな空間づくりを行います。

（２）メインターゲットである団体（教育旅行、研修、ツアーバス等）を積極的に誘致するためのスペース及び動線を確保します。

①教育旅行

・１学年が同時に観覧できること。
（１学年基準：一般的な中規模学校　３０名×２クラス想定）

・より多くの学校を誘致するため、６０名が同時に待ち時間無しで見学できることを検討する。

②研修

・研修スケジュールやメニューに応じた見学スタイルが可能となる空間とする。

・防災学習体験エリアや企業ブースなどのフレキシブル性を高める。

③ツアー

・高齢者や車椅子等の来館でもスムーズに見学できるよう、十分な観覧スペースと動線を確保する。

・バス１台３０名程度の団体が重なった場合でも、待ち時間無しで見学することができるように配慮する。(教育旅行６０名対応と同様)

６．展示コンテンツの考え方

（１）デジタル化や更新可能な展示システムを積極的に導入し、現在進行形で変わる福島の姿をリアルに伝える展示コンテンツづくりを行います。

（２）展示手法や演出手法は、多くの世代が楽しむことができ、誰にでも分かりやすいものを検討します。最先端だけにこだわらず、永く存在する施設の展示手法、演出としてふさわしい技術を取り入れます。

（３）展示を通してこの複合災害の事実をリアルに、そしてこれからの自分自身の防災へつなげるため、体験型の学習方式を取り入れます。

（４）展示室の一部を一定期間テーマを設けた企画展示として運用する、語り部等の口演と組み合わせたイベントを展示エリアで開催するなど、空間・コンテンツ共にフレキシブル性を高め、常に新しいコンテンツで来訪者を出迎えます。

（５）アーカイブ拠点施設を入口に、県内の他拠点等への回遊へとつなげるため、各拠点や事業の紹介、行ってみたくなるきっかけとなる展示や案内を取り入れます。

７．展示運用の考え方

学習内容、滞在時間、団体等にあわせて、複数の体験メニューを検討し、訪れやすく、学習効果の高い運用を目指します。

【例】　学校利用
企業等の利用
観光来訪
研究者等の利用
行政等の視察